

平成 26 年 8 月 21 日

東松島復興推進員だより（第 20 号）

～地を往きて走らず～

■インターン生による JICA 密着取材

JICA 東北支部で、インターン生として震災復興や国際協力の活動について学んでおります、宮城大学事業構想学部 2 年の千葉さちです。今回は、これまで東松島復興推進員として活動していた四倉推進員と佐々木推進員の 3 年間の任期終了に伴い、新推進員である秋山推進員と齊藤推進員への引き継ぎの現場と新推進員となった 2 人を含めた復興人材育成研修の現場を取材させていただきます。

震災復興モデル事業として、JICA は被災地の方々の地域復興を支援するために 2011 年 8 月から、宮城県東松島市に復興推進員を派遣しています。今回は、新推進員の引き継ぎも兼ねて行われた復興人材育成研修や東松島市視察を通して、新推進員のお 2 人の意気込みを取材しました。

〈新推進員ご紹介〉

1 人目は、秋山推進員です。秋山推進員は、青年海外協力隊の一員としてルワンダで活動をしていた経験を持ち、主に稲作の指導を行っていました。秋山推進員はルワンダでの経験として、「結果を出すことに焦りを感じ、自分の方向性を現地住民に押し付けてしまい、怒られたことがあります。しかし、その時の経験が『相手の立場に立って物事を考えることを忘れない』という自分の信念の根源になっています。」とおっしゃっていました。

2 人目は、齊藤推進員です。齊藤推進員も、青年海外協力隊の一員としてエチオピアで PC インストラクターとして活動をされていた経験を持っています。齊藤推進員は、「困難に臨む時でも「自分も相手も楽しく」を座右の銘に、活動しています。これは、今後推進員として活動する際にも忘れないでやっていきたいです。」とおっしゃっていました。

お 2 人とも海外でのボランティア経験を軸に、住民の方々と一緒に課題を見つけて、一緒に前に進んでいきたいです、とお話されていました。



左から齊藤新推進員、秋山新推進員、佐々木元推進員、四倉元推進員

<復興人材育成研修を通じて>

次に、復興推進員の引き継ぎと復興人材育成研修についてご紹介します。

復興人材育成研修では「ケースメソッド」という実話に基づくストーリーから問題を読み取り、その解決策を皆で考える、といった方法を用いて研修が進められました。特に「地域の復興にどう貢献すべきか」というテーマについて、JICA が復興支援を行うには何が問題なのか、何が必要なのかなどについて考察し、少人数制のグループワークを行いました。今回の研修には、JICA 高知デスクの方にもお越し頂き、各々が自由に考えを出し合っていました。

私のグループではまず、今回用意された復興支援についての教材を一読し、内容の整理を行いました。その後、この話にはどのような問題が隠れていて、どのように問題を解決するかを話し合うのですが、話が二転三転してしまい、なかなか一つの答えにたどり着きません。各々のメンバーが震災復興に対して強い思いを抱いているため、「地域の復興にどう貢献すべきか」という問いにたくさんの考えを持っていたのです。これは決して悪いことではありません。それだけ、震災復興に対してアプローチの可能性があるとということだからです。しかし、今回の研修で大切なのは、「皆で納得して1つの答えに導くこと」です。私は今回の研修を通して、人と意見を同じくして、その意見を皆で共有することがこんなにも大変だということを知りました。

もちろんこのような困難に直面しても、問題はいつまでたっても解決してくれません。皆で話し合っ、一緒に問題に向き合うしかないのです。



グループワークの様子



グループワーク発表会

グループには今まで野蒜地区で活動されていた佐々木元推進員もいらっしやっただので、現地の状況や復興のお話をたくさん伺うことができました。私だけではなく、秋山新推進員も熱心にお話を聞かれていて、新旧推進員同士で意見を交換されていました。一見、推進員が交代することは時間もかかり面倒なことのように思われますが、私は今回の引き継ぎの様子を見学し、そうではないと思いました。

新しい推進員に引き継ぐことは、復興の輪を広げることなのです。推進員というのは3年の間に、復興やその地域が抱える問題に直接触れ合うことで、膨大な知識を得ることができ、その地域にかなり近づいた存在になります。つまり、引き継ぐということは、現場で得た知識を次の推進員へ伝えることで、1人でも多くの人に東松島市の復興を伝えることになります。3年間の凝縮された思いや知識が積み重なって、次の推進員へと繋がっていくのです。

<東松島市内視察を通じて>

また、今回は東松島市内の視察も行いました。私は震災後に東松島市内へ行くのは初めてでしたが、海が美しく木々の緑も豊かで、とても感動しました。震災が起きて3年が経ちますが、あの美しさを守っていられるのは、東松島という地域の底力と住民の方々のお力なのだ実感しました。

<取材を終えて>

今回は、推進員の引き継ぎという貴重な現場に同行させて頂きました。推進員として働くにあたっての熱い思いや困難などのお話が聞けただけではなく、

実際に現場に赴くことができ、地域の風土を肌で感じることができ、とても嬉しく思っています。

また、「復興」と一口に言っても、目の前には数々の困難があり、それは決して一人だけの意見では解決できません。地域の皆さんが復興を進めていくにあたって、一歩でも前へ進めるよう、地域の中に入り寄り添うのが推進員の皆さんの役割であるように感じました。私も、微力ながら地域の復興に資することがしたい、と今回の取材を通して思いました。

最後になりましたが、今回お世話になりました東松島市の皆様、並びに推進員・JICA 東北支部の皆様、ありがとうございました。今後のご健勝とご活躍お祈り申し上げます。

JICA 東北支部 インターンシップ 宮城大学 千葉 さち

【推進員だよりバックナンバー：JICA東北ホームページ】

<http://www.jica.go.jp/tohoku/enterprise/shinsai/index.html>

以上

JICAは、宮城県、東松島市、宮城大学、東松島まちづくり応援団（NPO）等と共同で「地域復興推進員」を通じた震災復興モデル事業を東松島市で開始しました。このモデル事業では、早期震災復興につながる”市民協働のまちづくり”を支援することを目指しています。ここで得られた教訓や経験を将来の国際協力に繋ぎます。
